

中国の株式投資ブーム

上海駐在員事務所

秘書 王 一

2007年1月、今年に入りわずか10営業日で、新規に株式取引を開始した個人投資家が129万人にも達し、中国全土で株式投資ブームが起きました。証券会社の窓口とシステムはパンク寸前になり、上海においては「どう？株は儲かった？」が、流行の挨拶言葉となりました。

昨年11月1日の上海総合株価指数(終値)と比較し、今年1月24日までの3ヶ月足らずで、株価は60%も上昇しました。しかし、2月にはいると「バブル」を懸念した資金が一斉に引き揚げ、今度は急降下してしまいます。この調子で行くと今後も株価の乱高下はしばし続きそうです。

さて、この株式投資ブームの中、上海の個人投資家はどのようにして投資資金を調達したのでしょうか？下記に実際にあった驚きの事例を紹介します。

先の不動産投資ブームで高掴みをしたマンションを安売りし、株式投資に切り替えた。

退職老人が全貯金を下ろし、盲目的に株式投資を開始した。

クレジットカードを9枚作り、ATMから4万元(約640千円)を年利18%にてキャッシング調達し、株式に投資した。



株価の動向を熱心に見る上海市民



熱気あふれる証券会社の窓口

このような事例を見ると、今後、中長期的な株価の下落局面が出現した場合、家、貯金、年金等の資産を株式市場に吸い取られてしまう人が多くなることが容易に予想されます。中国にとって、個人投資家の成熟は緊急の課題となっているのです。

しかし、なぜ多くの一般庶民が危険を冒してまで、株式売買をするのかというと、既得権限や人間関係の有無で富の配分が決定する中国社会において、株式が比較的公平な投資先であると考えられている事情もあるのです。

私は投資をするにあたり、国内外の社会状況と資本の流れを見極める目を養うことが、非常に重要であると考えます。

実際、最近の中国株高は、様々な手段により大量流入した海外からの投資資金が、先駆けとなって演出されたものであり、まだ成熟度が足りない中国個人投資家の勢いに追随する形での投資は、危険が大きいとも感じています。

以上